

## (142) 栃木県日光市中三依の中ノ沢鉱山

前書き 本鉱山跡は、現時点では、探査が不十分と思われ、期待薄の場所である。が、これまでの探査結果を纏めて置かないと、何時の時か再探査をする時に、一苦労をする。再探査なども期待して、ここで一応纏めておくことにした。何時か、より内容のある探査記に書き換えたと考えている。

参考文献(1)に、この鉱山は4行足らずの文章で紹介されていた。「・・・中三依より男鹿川について遡り、更に中ノ沢を上がる。海拔1000mで付近の地形は険しい。・・・」が、この案内に従って男鹿川を遡ったら、上三依に行ってしまい、途中に「中ノ沢」はない。中三依より、男鹿川の支流である入山沢を遡ると、上流に「中ノ沢」があるのを地形図で見つけることができた。多分、引用文中の「男鹿川」は、「入山沢」の間違いではなかろうかと考えた。が、これだけでは、裏付けが足らない。また、海拔1000mの値自体にも不信感が募る。

筑波の地質調査所で、参考文献(2)である栃木県地質図(20万分の1)を入手した。後掲の図3である。現在の地形図と対応させてみると、中ノ沢の上流、芝草山の頂上の東側に、硫化鉄鉱床の記号がマーキングされているのを見つけた。この地質図には、近傍に、芹沢鉱山、越路鉱山もマーキングされている。この2つの鉱山跡については、本探査記で既報である。マーキングの位置は、正確であった。このことから、中ノ沢鉱山は、芝草山頂の東側の、中ノ沢当たりにマーキングされた場所にあるであろうと判断した。又、中ノ沢に沿って、林道も地形図中に記されていた。(当初、この林道が、中ノ沢鉱山への道であると考えたのであったが。この予想は外れたようである。この林道は「新道」とあると判断した。)

この林道は、鉱山への道でもあったろうと考え、ハイキング・トレッキングがてら、探査に出かけた。中ノ沢入口から、徒步で林道を登っていった。結構広い林道であった。標高1000m以上の所まで進んだが、残雪が林道に残っており、何の成果もなく、引き返した。雪の消えた時期に再度訪問することにした。

後日、再探査に出かけた。中ノ沢入口にあったゲートが開いていたので、途中まで車で登り上がった。適当な所に車を止め、林道を歩いて先へ進んだ。途中、幸運にも、山菜採りの人には会った。この当たりに詳しく、鉱山について質問すると、沢の左岸に坑口があると教えてくれたが、会った時の林道位置は沢より遙かに高い位置にあった。林道から沢に下るにしても斜面も急である。地形図を見ると、林道を上り詰めていくと、林道が沢に近接していることがわかった。周りの探査も兼ね、林道を上り詰めると、沢に会った。結構広く平坦な沢であった。ここから、沢を下った。途中、教えられたとおり、沢の左岸、河床水準にしつかりとした坑口跡を見つけた。

現地への経路は次の通りである。今市から121号を北上していく。五十里ダムを過ぎ、直に中三依地区に着く。右手に中三依駅を見て、橋を通過した少し先で、左折し、狭い村道に入っていく。入山沢に沿った村道を進んでいく。見通し沢を過ぎた先に、中ノ沢林道への分岐がある。ゲートが開いていれば、先に車で進める。ゲートが閉まっていたら、入口当たりに車を置いて、徒步となる。

鉱山跡として、ただ1つの坑口跡を確認しただけである。坑口近傍を注意して探査したが、他の鉱山跡らしい形跡は何も見つけてはいない。ただ沢脇に、何カ所にもあった石垣組みは気になっている。沢道であったのであろうか?

参考文献(3)の「藤原町史」中に、藤原地区にあった「主な」鉱山の位置を示す図を見つけた。後掲の図4参照。越路、芹沢と並んで、中ノ沢も記されている。と言うことは、かつてはそれほど小さい鉱山ではなかったのではなかろうか。坑口が1箇所だけとは思われないのだが。見つけた坑道(写真5、写真6参照)は鉱脈に向かって開削した「通道坑」のような気がしている。今回確認した現地近傍には、見つけた1つの坑口以外に、他の鉱山跡があるように思える。沢に沿って、道らしい石垣組が、上流にもあるので、その先に何かあるのかもしれない。機会があったら再訪したい。

2015年4月、5月探査



図1 国土地理院の地図サービスより複写掲載。次の図2に、この部分の南部の地形図を掲載している。これら2枚の地形図を上下に並べてみるとよい。Pは車を駐車した場所。Eは一応林道の終点。黄緑丸が坑口跡。P点から坑口跡まで、標高差大凡200m。徒歩30分から1時間か。沢は広く、傾斜はなだらかである。沢にはごく希に、微小な黄鉄鉱に汚染された転石はあった。今のところ、余り期待される鉱山跡ではないが、沢登りを楽しみ、山菜を探しながらならば、それほどつまらなくはないであろう。E点より上流に何かあるのかもしれないが、未探査。

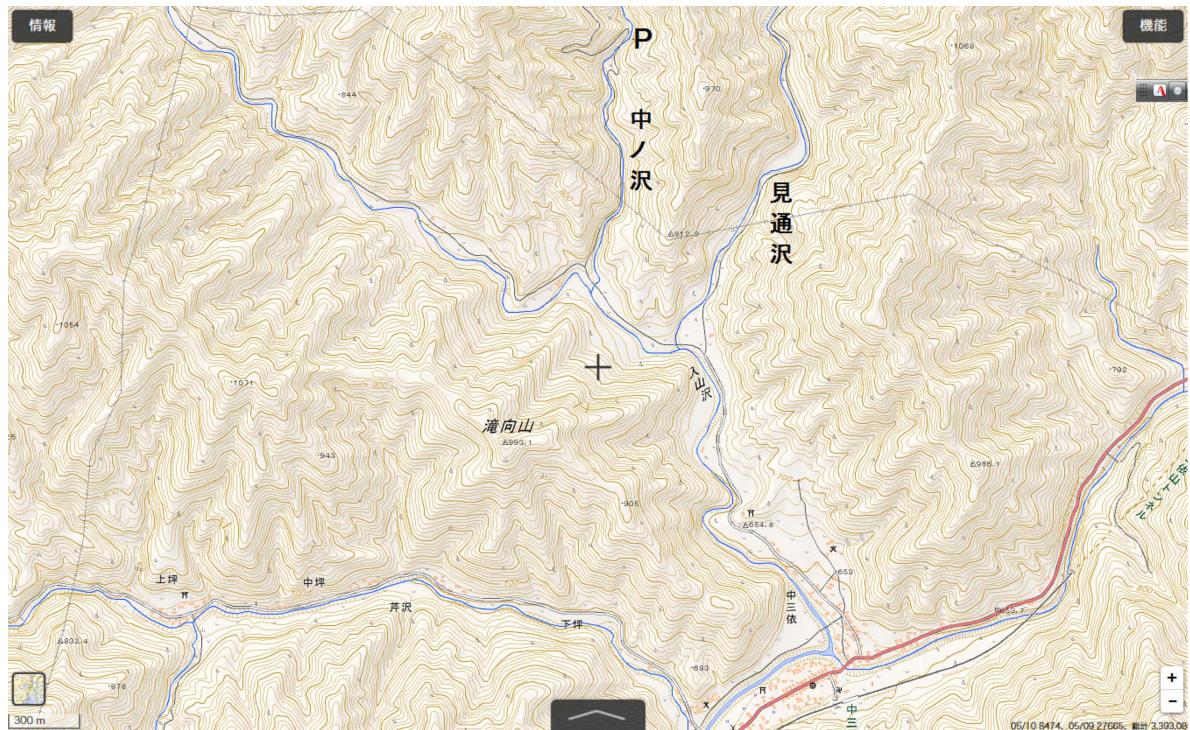


図2 図1の南部の地形図。五十里湖から北上してくる。中三依地区で、入山沢に沿った村道に入していく。中ノ沢に沿った林道に入つて行く。P点は車の停車場所。その先は、図1を見ること。因みに、中三依地区で、図中の下部の芹沢に入り、西方向に進んでいくと、芹沢鉱山にたどり着ける。本探査記で既報である。

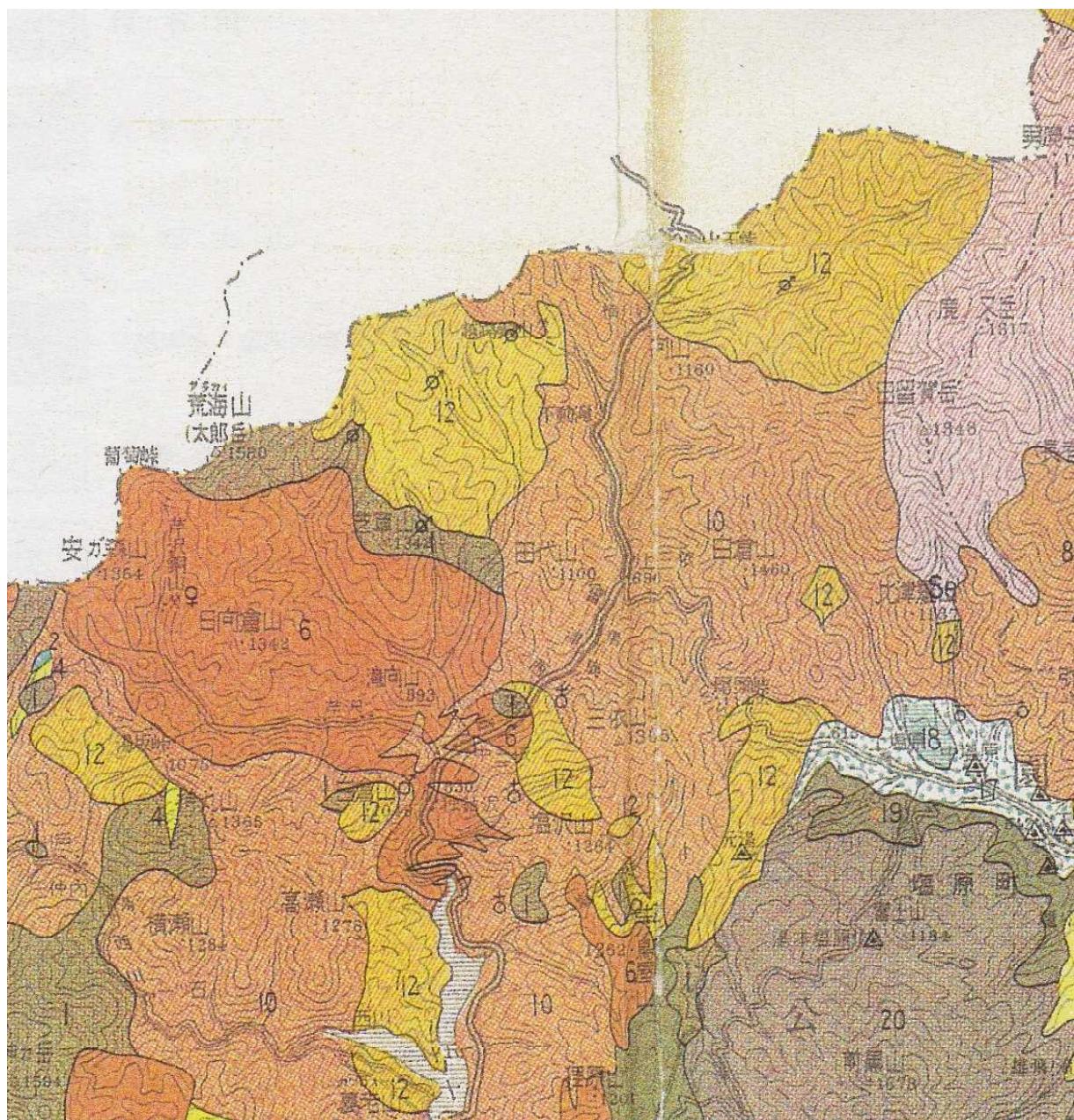


図3 参考文献(2)より複写。栃木県地質図の北西端部分の拡大図。中央左端に芹沢鉱山、中央上端に越路鉱山の名が見える。芝草山頂上の少し右、田代山の左に硫化鉄鉱床の記号(丸に斜め矢印)がマーキングされている。現地形図と対照すると、中ノ沢上にある。且つ標高も1000m付近もある。「中ノ沢」鉱山の位置に違いない。

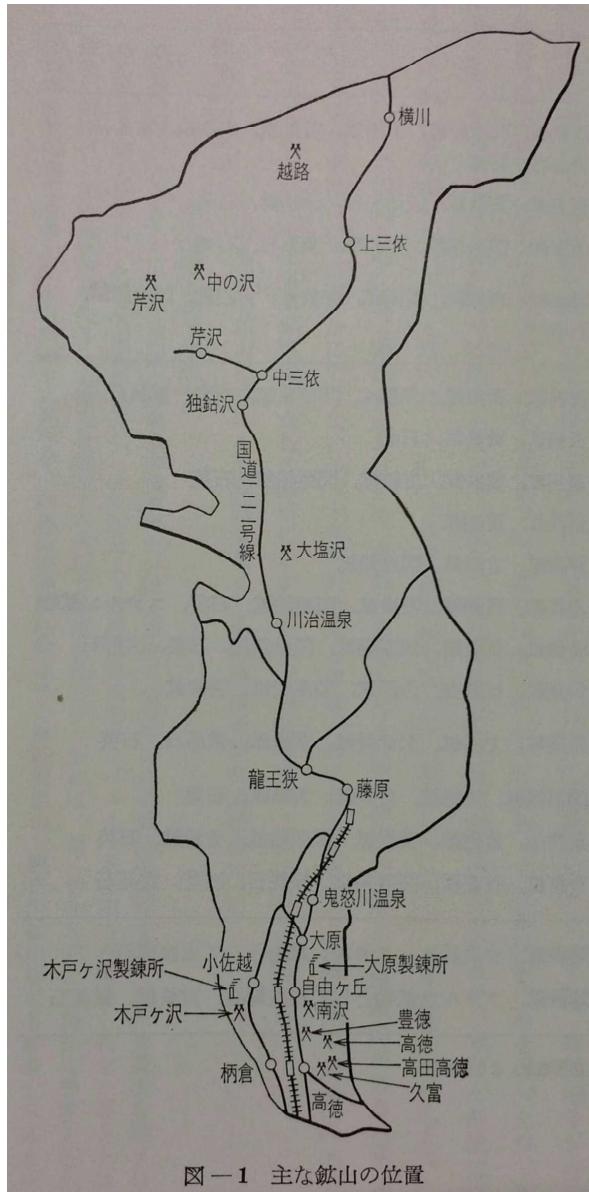


図4 藤原地区にあった主な鉱山の位置。参考文献(3)より。越路鉱山、芹沢鉱山と共に、中ノ沢鉱山名が記されている。「主な」と語っているには、中ノ沢鉱山は「極小な」鉱山ではなかったのであると思うが。

図一1 主な鉱山の位置

## 鉱山跡写真



写真1 中三依地区で、121号を左折し、入山沢に沿った村道を進んでいく。中ノ沢に架かっている橋を渡ると直ぐに、右に分岐している中ノ沢林道に出会う。この付近に数台の車は留め置ける。ゲートが閉まっている時に利用できる。



写真2 図1, 図2中に記した文字Pの所である。林道はこの所で大きく左に曲がっている。目の前に砂防ダムがある。この所から、徒步で沢登りとなる。この付近の道幅は結構あるので、ここに車は留め置けよう。



写真3 沢の右岸にあった石垣組跡。同様なものは幾つもあった。昔の道であったのは確かなようである。が、何のため？ これほどの土木作業をしたと言うことは、上流にそれなりの（＝投資に値する）「鉱山」があったからかもしれない。因みに、地形図である図1, 図2中に記されている、沢の右岸上部に沿って延びている林道は「新道」、沢の右岸の河床水準に沿って延びていたと推断できる、この沢道が「旧道」であったと判断した。



写真4 沢登り途中の一葉。沢と言うよりは川と行ってもよいほど、幅は広く、傾斜も緩い。殆ど不安なく沢登りができる。



写真5 沢の左岸にあった坑口跡。位置は沢床水準である。入口周りには現在でも大きな木が無いので、「当分」は木々に隠されることは無いであろう。下半分は、土砂で埋まっていた。多分増水時に流れ込んだのであろう。中の様子は次の写真。



写真6 その内部。壁面は非常に綺麗である。坑底は土砂が堆積し、高さは低くなっている。坑道は左にゆっくりと曲がり、先に続いているようである。このような坑道は前方にある鉱脈への通道坑らしいことを想像させるが。奥には入り込んではいない。

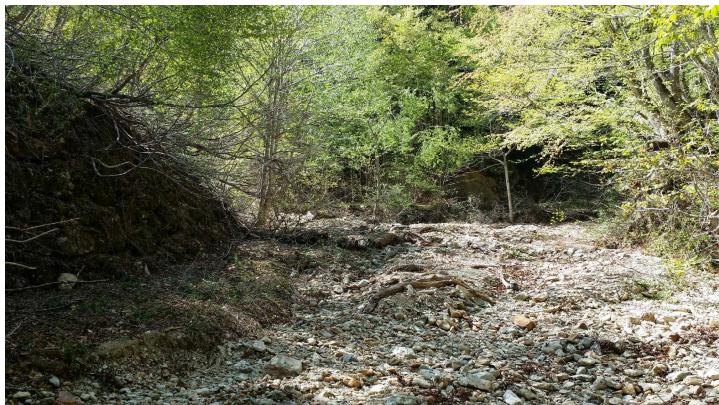


写真7 図1に記したEの所での一葉。沢は前方で2つに分岐している。「新道」の林道は左側の沢で終了しているようである。が、旧道は右側の沢の上流に延びているようである。その先は、未探査。

## 鉱物写真

なし。

## 参考文献

- (1) 「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、昭和48年(1973年)。
- (2) 「栃木県地質図」、20万分の1、栃木県、工業技術院地質調査所、昭和38年、内外地図株式会社。」
- (3) 「藤原町史 通史編」、藤原町、1983年。  
因みに、この文献には、大正9年刊の「藤原村誌 前編」には、幾つかの鉱山が紹介されている、ことが記載されている。

# 中ノ沢鉱山跡追探査

現地への岩友の案内で、本鉱山跡を再訪した。鉱山跡について新発見を期待すると共に、入手したガーミンでしっかりと経路ログの取得も兼ねていた。初探査を行った2015年時には、未だガーミンを持ってなかつたので、本論の図1、図2で示しているように、地形図中に、視認で注目箇所を書き入れるしかなかつた。

今回の追探査で得られた中ノ沢鉱山跡へのガーミンによる経路ログを、図1、図2、図3に示す。本論の図1、図2と対比すると良いであろう。以下に本追探査で気がついたことを列記する。

(1) 2015年の探査時には開いていた、中ノ沢入口にあったゲートは閉じていた。ここから歩くことになるが、ゲートが閉まっている理由に直ぐ気がついた。入口から程なくして、中ノ沢に沿って延びている林道が若干修復されてはいるが、土砂崩れによるのであろう、その先は完全に林道が消滅し、沢だけとなっていた。先にある砂防ダムの下流、右岸側にある支流の沢が最上流部当たりから大規模な土砂崩れを起こし、それが中ノ沢に注ぎ込んだ結果と思われる。Yahooの地図の写真編から土石流の跡が見てとれる。(なを、Google Earthでは見てとれない。撮影時が古いのであろう。) が、中ノ沢を遡るのは容易であり、途中から林道は生きていた。

(2) 生きていた林道より上流の中ノ沢では、大規模な土石流は発生しなかつたようであった。前回と同様に、沢の遡上には何の困難もなかつた。

(3) 下りには、中ノ沢の右岸上部にある林道を利用した。が、林道への落石、林道の利用者減による人の手入れの不足、沢における林道の崩落などで、結構通り抜けるのに時間がかかった。当分、この林道を下りに利用するのは薦められない。登ってきた本流の中の沢をそのまま下った方が良いであろう。経験知識であるが、近年、壊れた林道の修復は滅多には行われていないようである。林道を利用する林業者がいなくなつたためか、崩壊したらそれまでのよう。

探査日 2018年7月

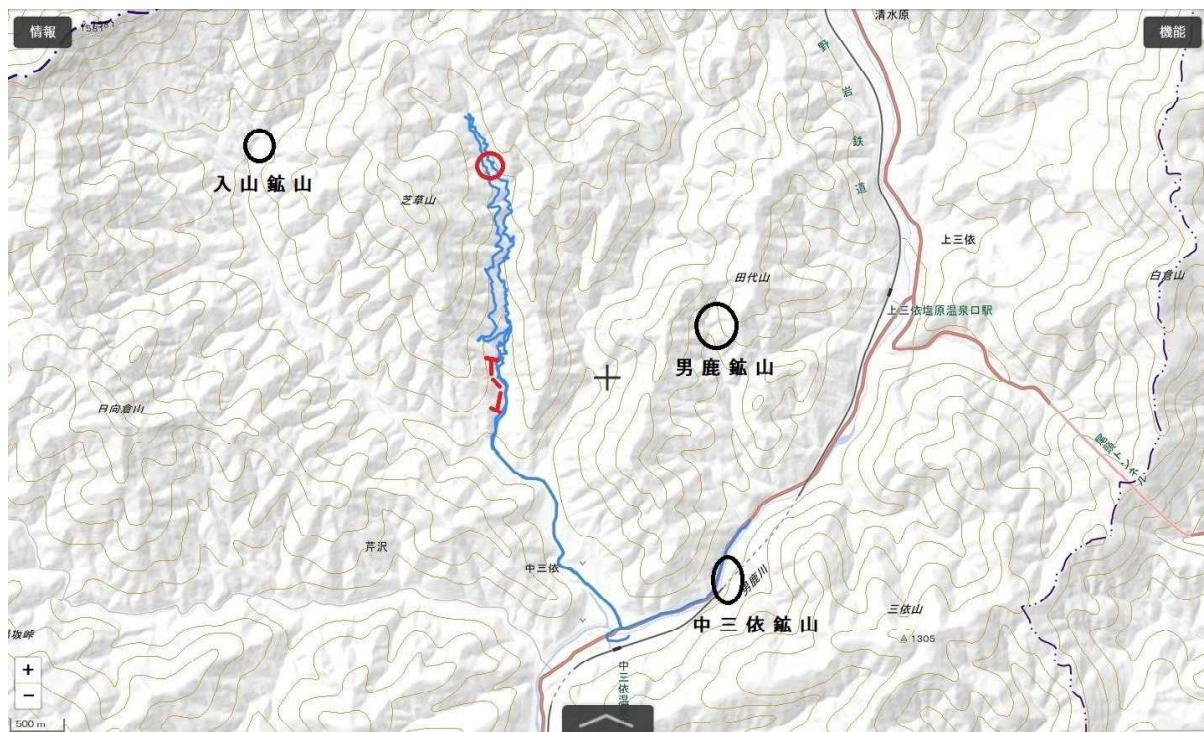


図1 青色曲線が中三依温泉駅付近から現地までのガーミンによる経路ログ。赤丸が現地。赤破線が林道消滅区間。ここは沢の中を遡る。なを、著者による付近の鉱山跡も参考のために記入している。各鉱山跡については、本鉱山記の各項を参照すること。

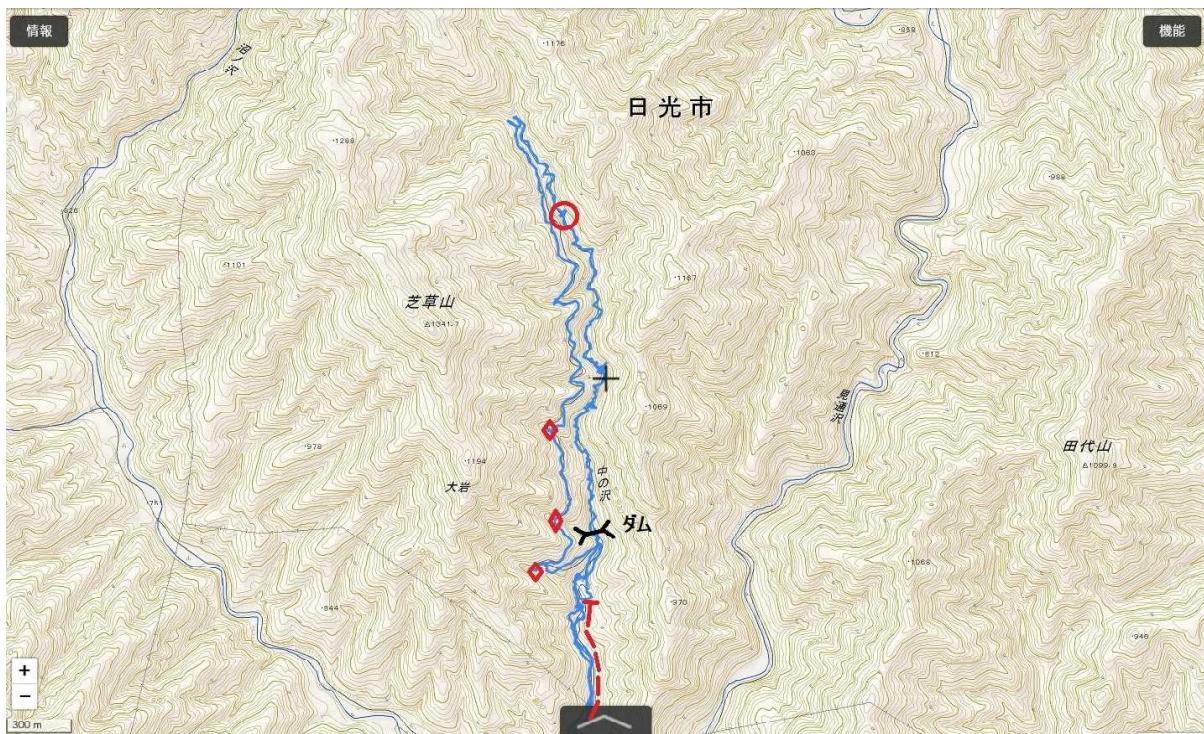


図2 図1の部分拡大図。赤丸が現地。赤破線は林道消滅部分。登りは中ノ沢を、帰路は中ノ沢右岸上部に伸びている林道を利用した。本文で記述しているように、結構荒れていた。赤菱形の部分は支流沢の崩壊により林道が喪失していた地点である。が、注意すれば渡れないことはない。

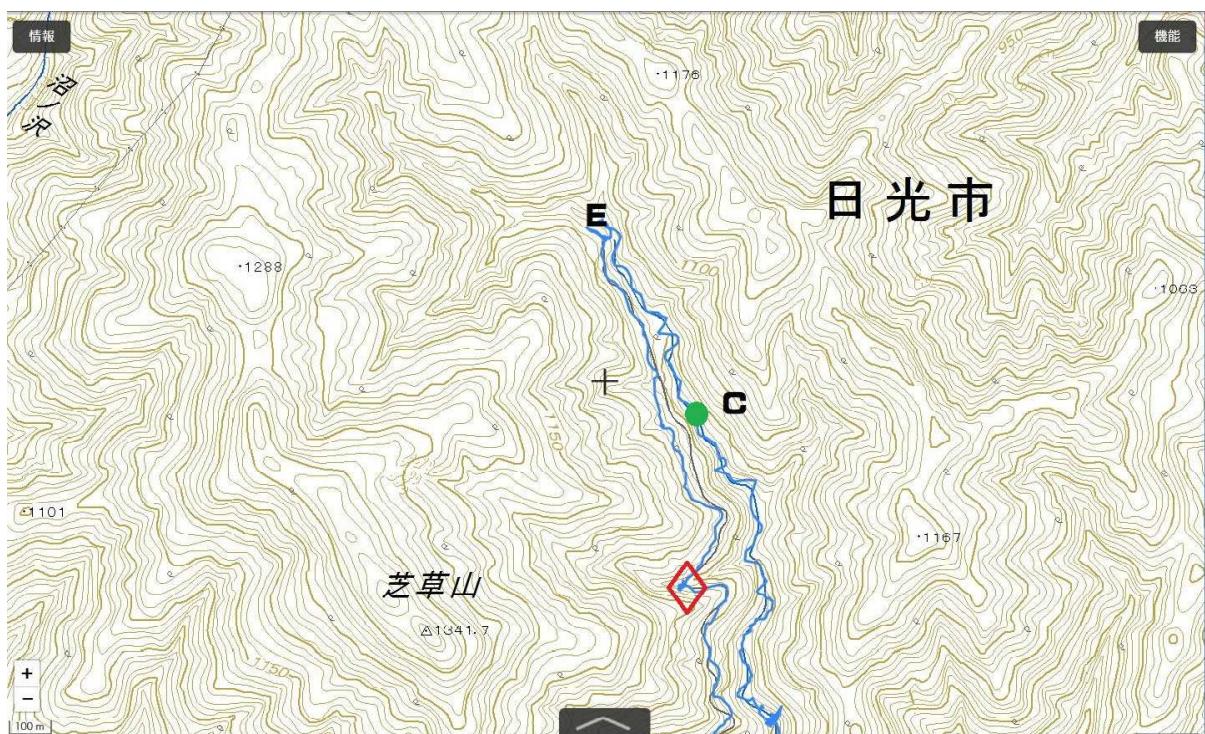


図3 図2の部分拡大図 黄緑丸のCが坑口跡。沢の左岸、沢水準より少し上にある。Eが沢から林道に入ったところ。E近傍の林道には、何と「カーブミラー」があった。かってはここまで車が来ていた！ そう言えば、この林道は結構道幅が大きい。林道の他の箇所にも何カ所かに、車用の表示器があった。E点付近及びこれより上流部は、残り時間が少なくなってしまったので、今回も未探査である。しかし、この付近には、何かがあったのかも知れない、わざわざ「車道」を開削する理由のための。

## 鉱山跡写真



写真1 沢遡上中に、C店よりズッと下流の左岸の沢水準少し上にあった、試掘坑らしい穴。

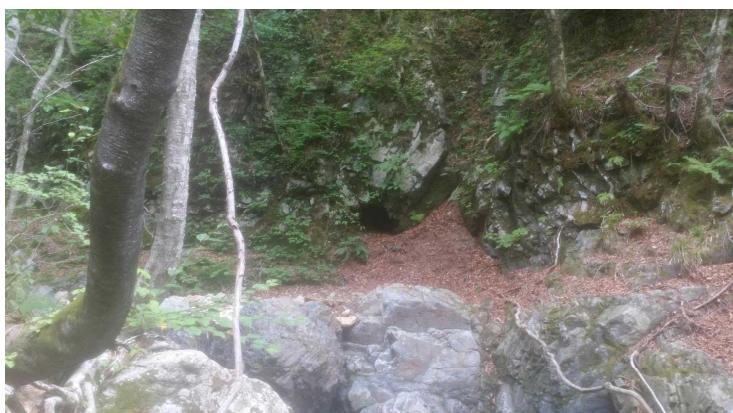


写真2 更に沢の上流にあった、試掘坑らしい穴。



写真3 沢中の大きな石灰石の転石。



写真4 C点である。写真中央部の、木の葉で隠された黒い部分が本論の写真5で紹介していた坑口跡。内部の様子は変わることはなかった。なを、左の2人が岩友である同行者。

## 採集鉱物写真

なし。次回を期待している。